

GCI Global View

2010年1月4日

【目次】

| | |
|------------------|-----|
| ● 年頭所感 | P.1 |
| ● Global Markets | |
| 1.オーバービュー | P.2 |
| 2.資本市場 | P.6 |

【連絡先】

株式会社 GCI アセット・マネジメント

○住所：〒101 - 0065 東京都千代田区西神田 3 - 8 - 1

○電話番号： 03 - 3556 - 5540(代表)

○電子メール： administration@gci.jp

金融商品取引業者

関東財務局長(金商) 第 436 号

日本証券投資顧問業協会 加入

当資料は、株式会社 GCI アセット・マネジメントが情報提供を目的として作成したもので、投資家に対する投資勧誘を目的とするものではありません。当資料は、当社が信頼できると判断した情報データに基づき作成しておりますが、その内容の完全性、正確性について、当社が保証するものではありません。当資料における見解は作成時点のものであり、今後予告なく変更される場合があります。

●年頭所感

新年明けましておめでとうございます

昨年は「デレバレッジ」と「原点回帰」がキーワードとなったオルタナティブ投資運用業界でしたが、原点回帰とともに、「信頼回復」が大きな課題となった1年でもありました。業界全体としては資金流出が夏場には一段落しその後純流入に転じ、パフォーマンスも特に4月以降大きく回復しましたが、リーマンショック以降のデレバレッジの動きの中で投資資産の流動性が枯渇し大きく値を下げたことでパフォーマンスを悪化させたファンドが、やむを得ず市場が回復するまでファンドの解約を停止し、その後4月以降に「デレバレッジ」が終息に向かい、その反動の中で資産価格が戻ったことで表面上リターンを稼いだ例も多く、一方で2008年に健闘したいくつかのファンドが2009年は苦戦を強いられたことから、体感でのパフォーマンスはインデックスの動きよりもややモデレートな印象もありました。2010年は、本格的な信頼の回復に向けてまさに真価が問われる1年となります。

弊社では昨年4月に、日本企業にフォーカスし、ハイブリッド証券を含むキャピタルストラクチャー全体を横断的に俯瞰し、その中での価格の非効率性をとらえてリターンの創出を目指す「日本ハイブリッド戦略」を立ち上げました。昨年の1月、総悲観が世界を覆いつくし、「ヘッジファンド業界は消えてなくなるのではないか」という極端な見方まで台頭する極めて困難な時期ではありましたが、新たに意欲溢れるマネジャーがGCIに加わり、分かりやすくかつ真に投資家の信頼に値する運用を提供するには絶好の好機であるとの想いを共有し、この戦略立ち上げに向けたプロジェクトを正月明けから本格的にスタートさせました。難しい時期にもかかわらず立ち上げ時にご資金を投じて下さった投資家様をはじめ多くの方々からのご支援をうけ4月に運用を開始し、運用開始以降高水準のパフォーマンスを継続することができました。お陰様でその後も多くの投資家の方々からご関心を寄せていただき、またご評価を頂戴し、心から感謝いたしますとともに、今後も結果を残し続けることで投資家の皆様のご期待に答えて参りたいと存じます。

また機関投資家の皆様とのディスカッションを通じて、「新興マネジャー」への投資により戦略的な分散を図る意義を多くの皆様と共有できたことも収穫となりました。弊社では今年も「新興マネジャー」と、「日本とアジア」をキーワードとして、日本人の「巧み」とアジアの「ダイナミズム」に着目しながらより質の高い投資サービスのご提供を目指して参ります。オルタナティブに特化した独立系ブティックハウスとして、これまで以上にスピード感をもって機動性と柔軟性を発揮しながら、投資家の皆様からの信頼に値する投資運用サービスの提供を役職員一同目指して参ります。

今年もどうぞよろしくお願いたします

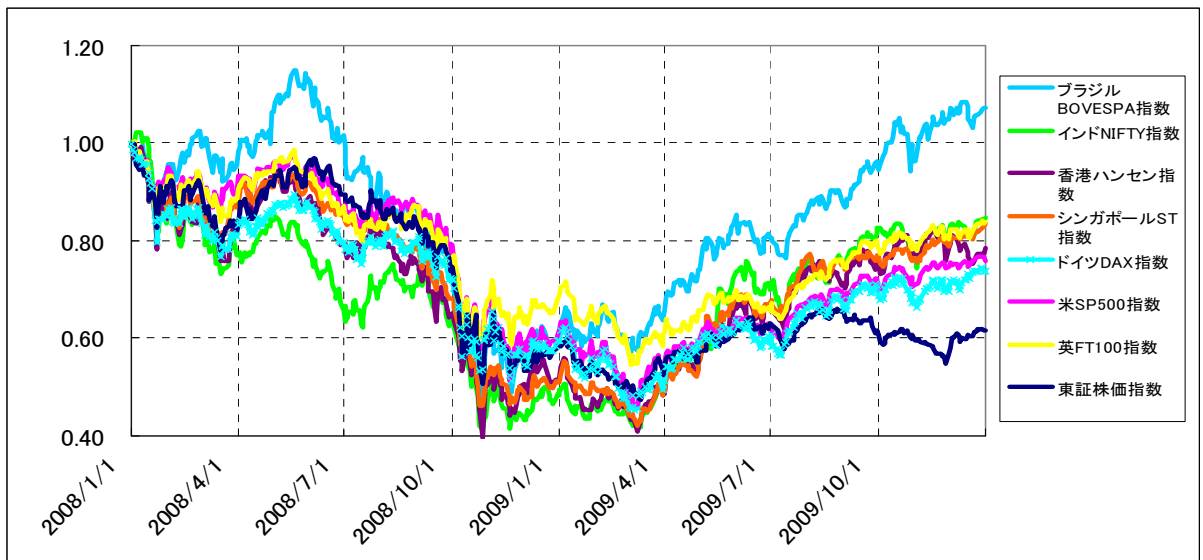
末永 孝彦

Global Markets (12月21日～12月31日)

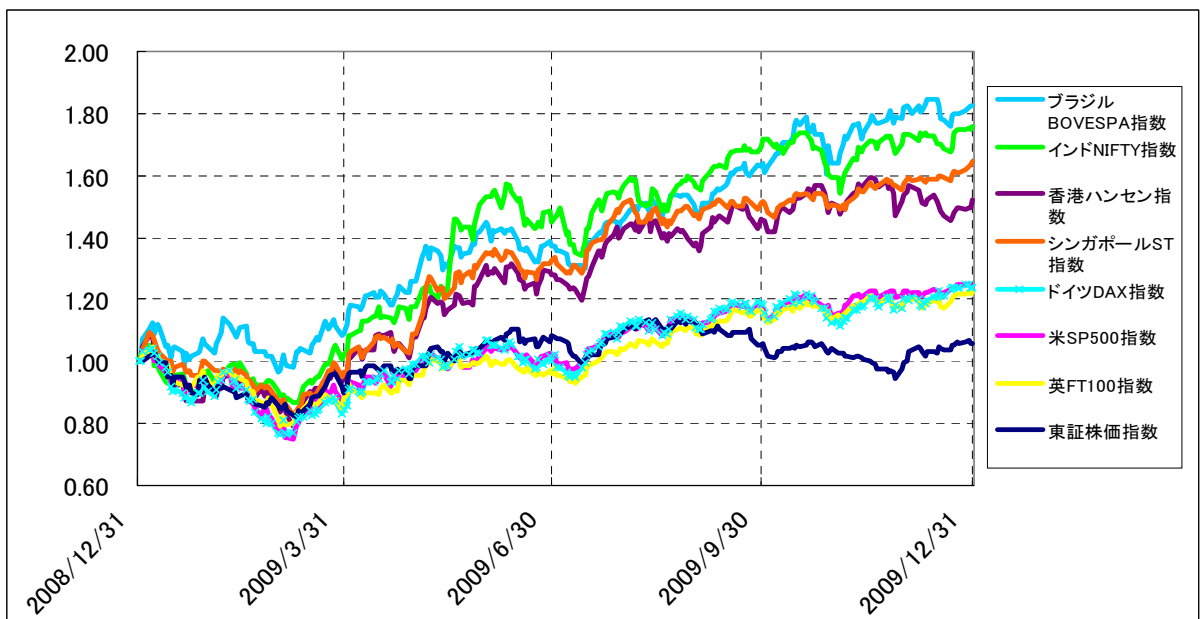
1. オーバービュー

休暇モードで比較的閑散とした中を、株式市場は欧米中心に直近高値を更新するなど比較的堅調な推移で年末を迎えた。年間で見ると新興市場が5～8割程度の上昇、欧米が2割強といった中、円安により何とか年末にむけて帳尻をあわせた日本株は、日経平均で見ると欧米を少し下回る程度の年初来リターンまで戻したが、TOPIXでは僅か5%とようやく前年末比マイナスを阻止した状況であった。今年も市場の視線は新興国に集まることが想定されるが、その動向を左右する大きな鍵を米国の金融政策が握ることになるであろう。昨年11月は緩和継続期待が市場を支配し株高、債券高が共に続いたが、12月は当局の方針に大きな変化は見られないものの、市場の構えは11月とは異なり、株は概ね横ばいの中を米国債は短期債も含めて下落し利回りは上昇した。景気回復感が強まり、緩和早期解除期待が市場で高まるようだと株にはネガティブに働く可能性には留意したい。

【各国株価インデックスの2007年末からの変化率の推移】

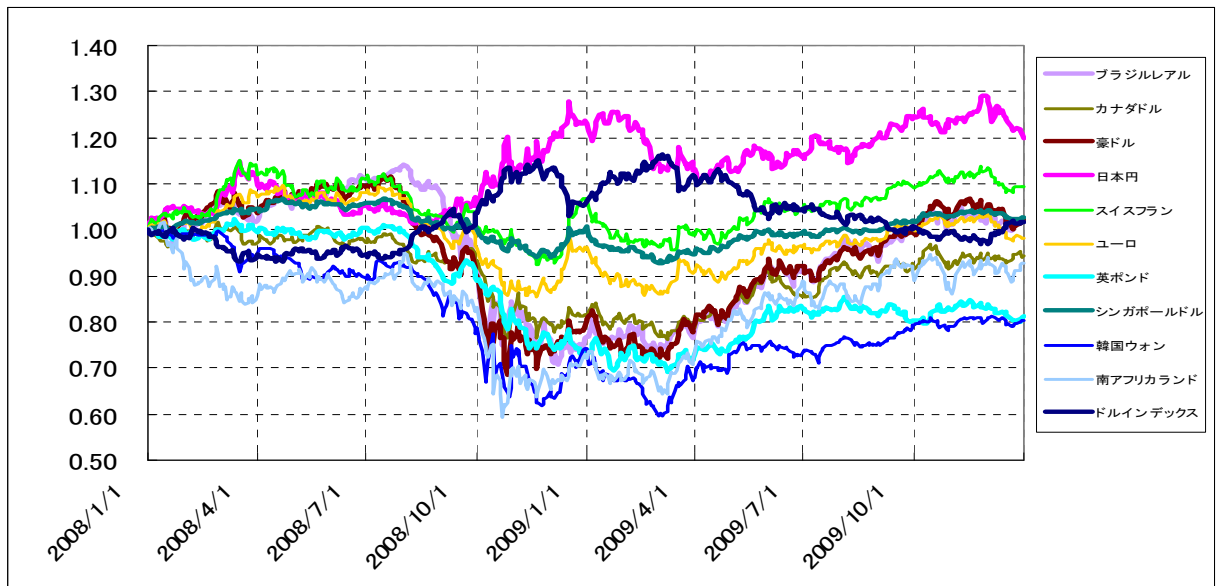


【同 2008年末からの変化率の推移】

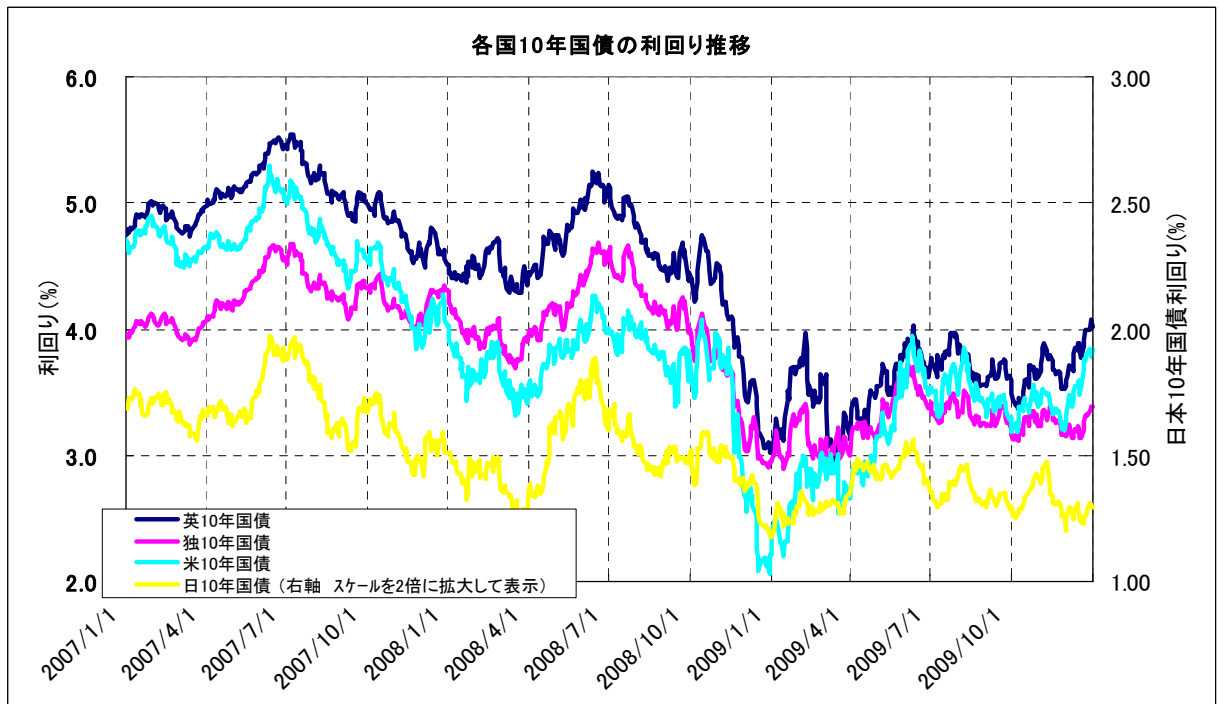


ドルの反発は一服となり、新興国や資源国通貨は上昇したが、対円では引き続きドル高円安に。デフレ退治にむけた政府と日銀の取り組みを意識した展開が今後も続く可能性には留意したい。

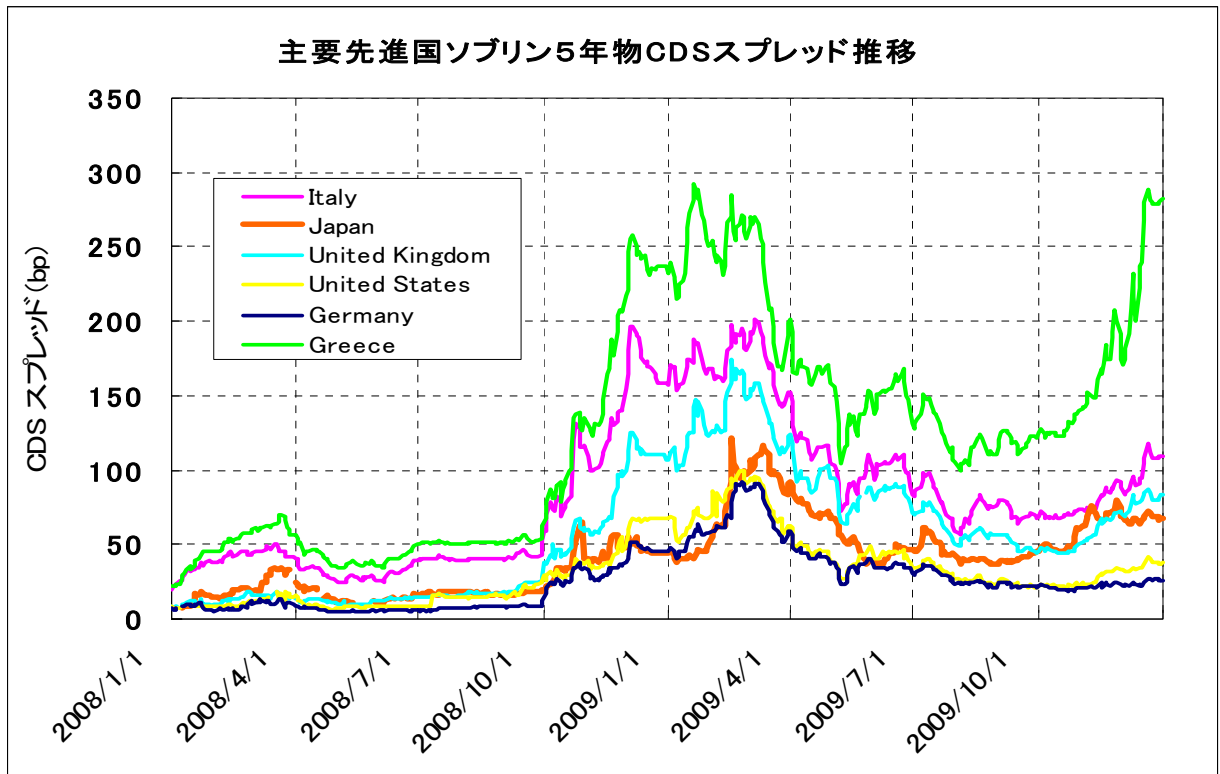
【各国通貨の2007年末からの対ドルでの変化率の推移】



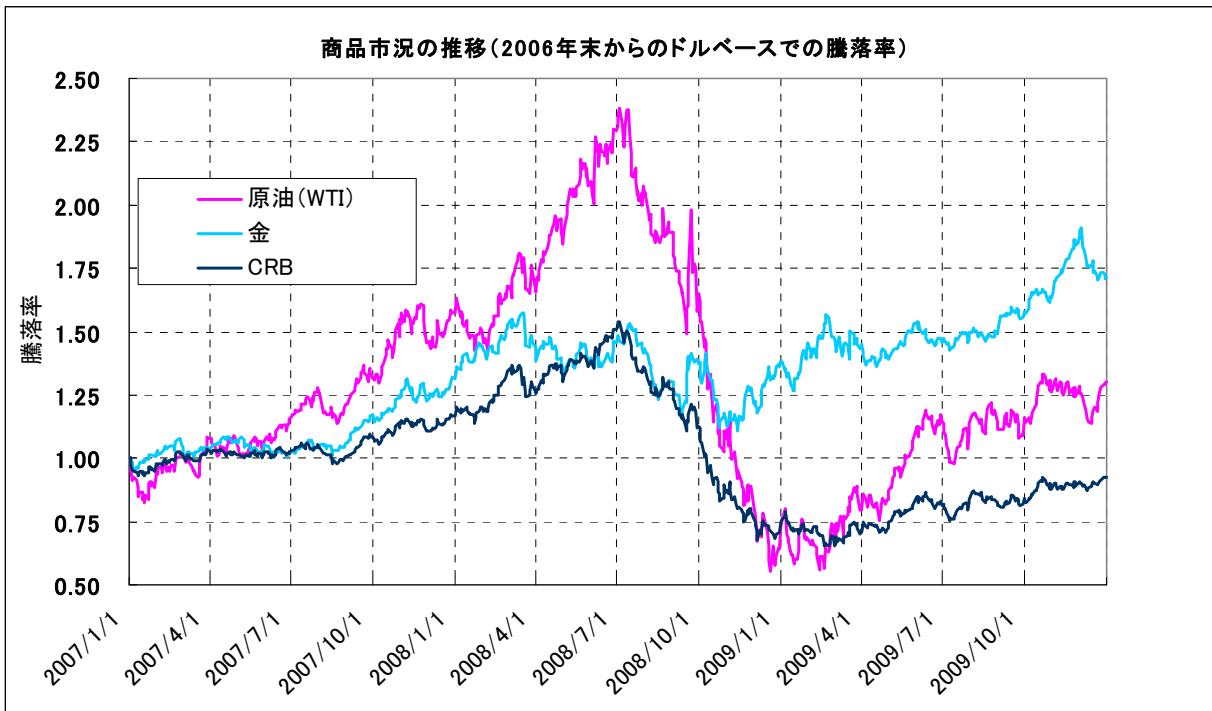
中央銀行の緩和継続方針が大きく変化している状況ではないものの、足元のやや強めの経済指標を意識して、欧米、特に米国と英国で、短期債も含めて利回り上昇が進んだ。



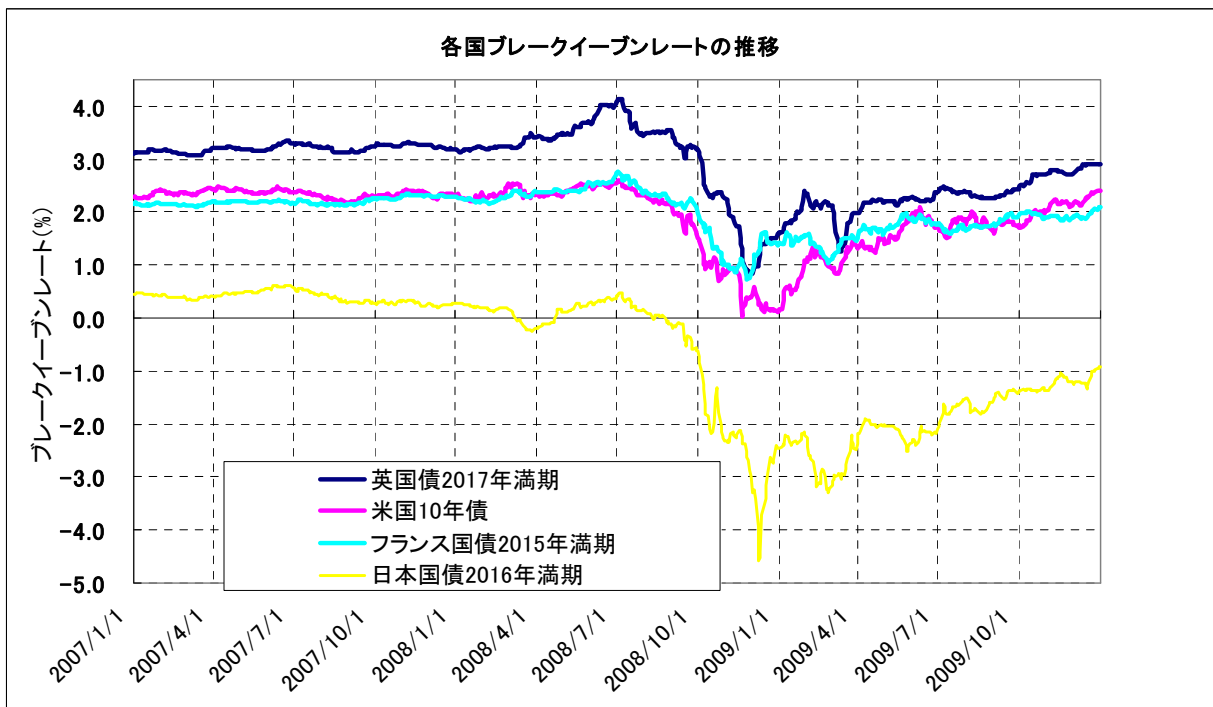
ソブリン物 CDS は大きな動意なく、12 月に拡大が進んだギリシャも高水準での横ばいに。



原油は欧米での厳しい寒波も材料に反発。



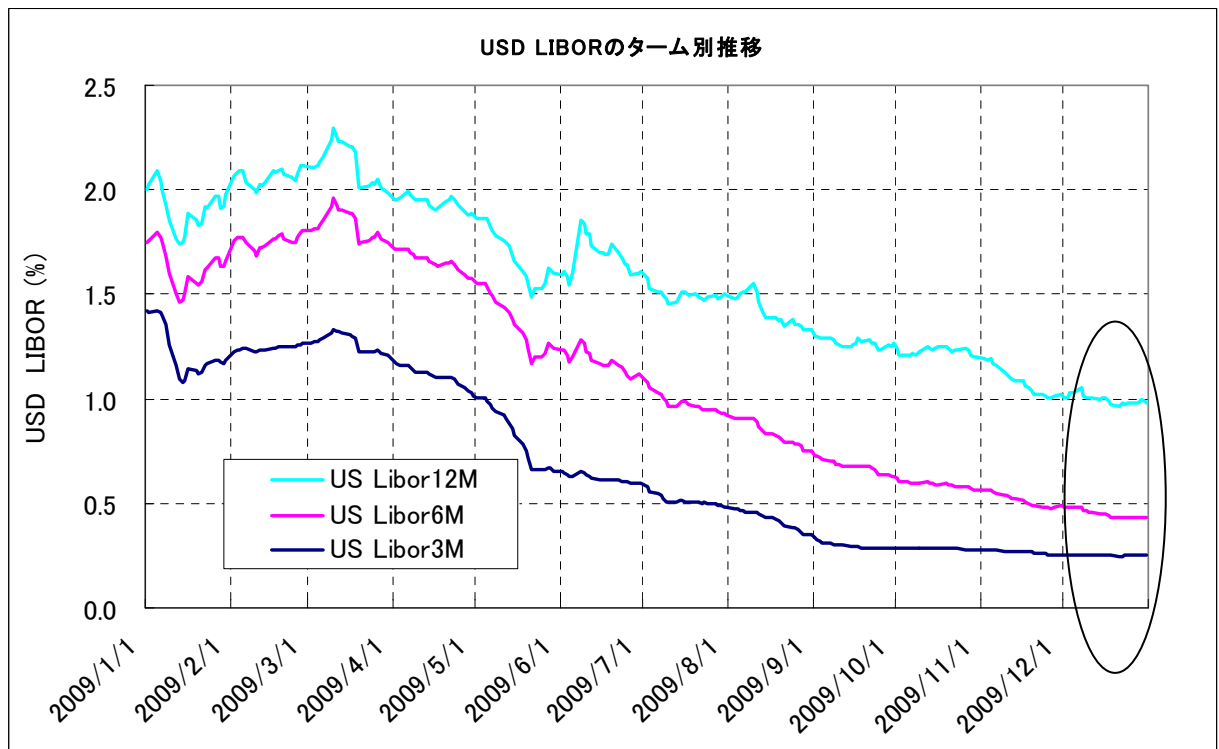
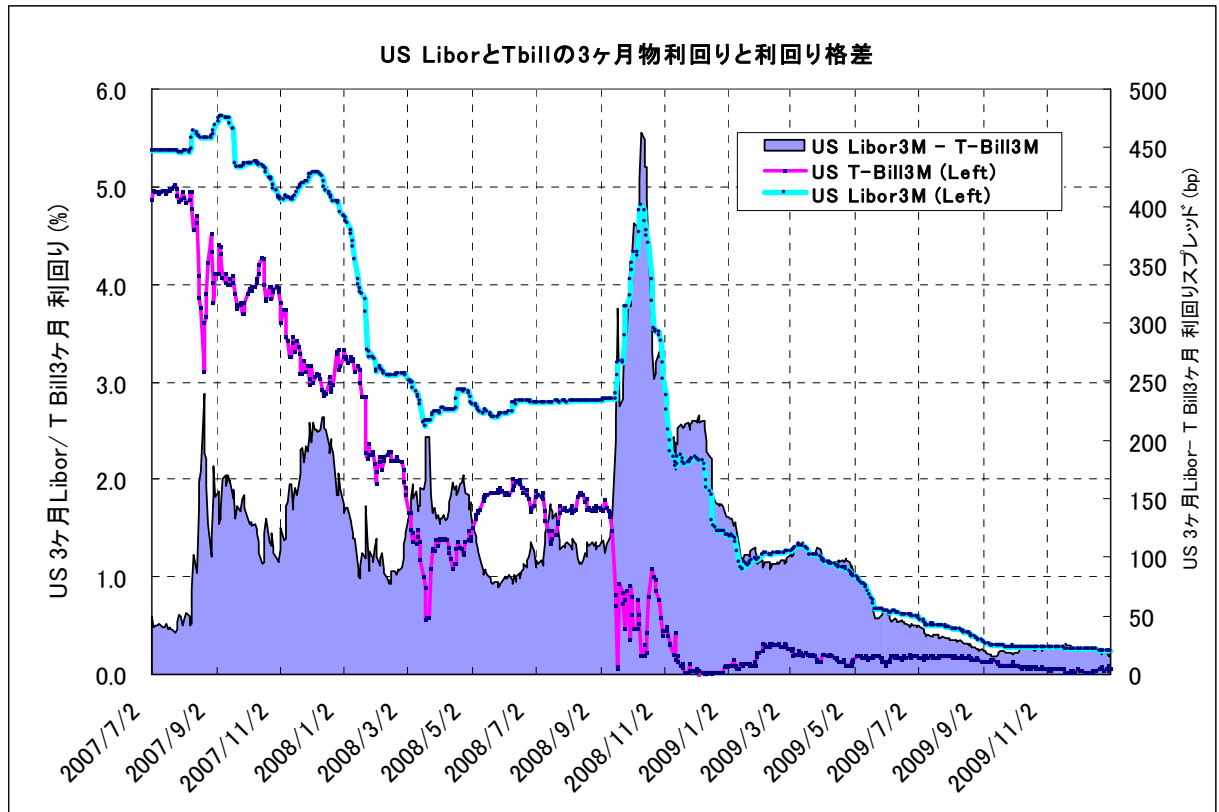
英米で拡大傾向に。



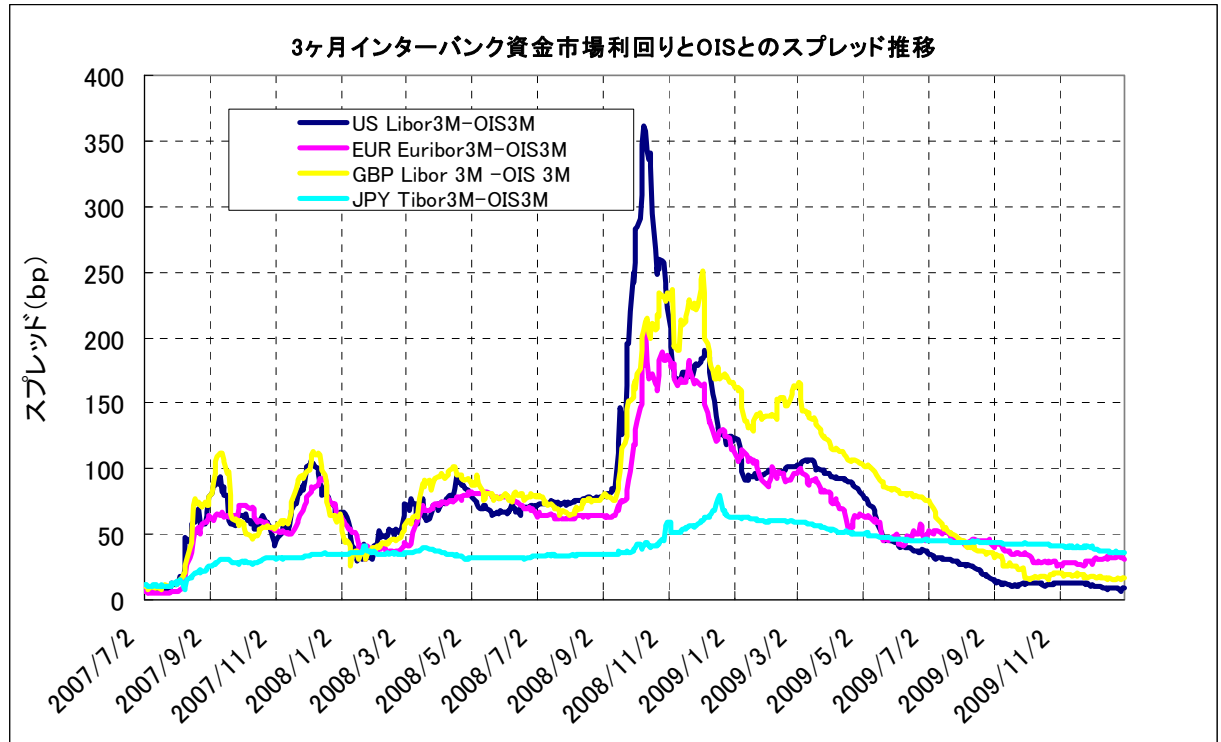
(末永)

2. 資金市場～ほぼ変わらず

米国債には上昇圧力が加わったものの、資金市場は年末越えの波乱もなく、大きな変化なく年末を迎えた。

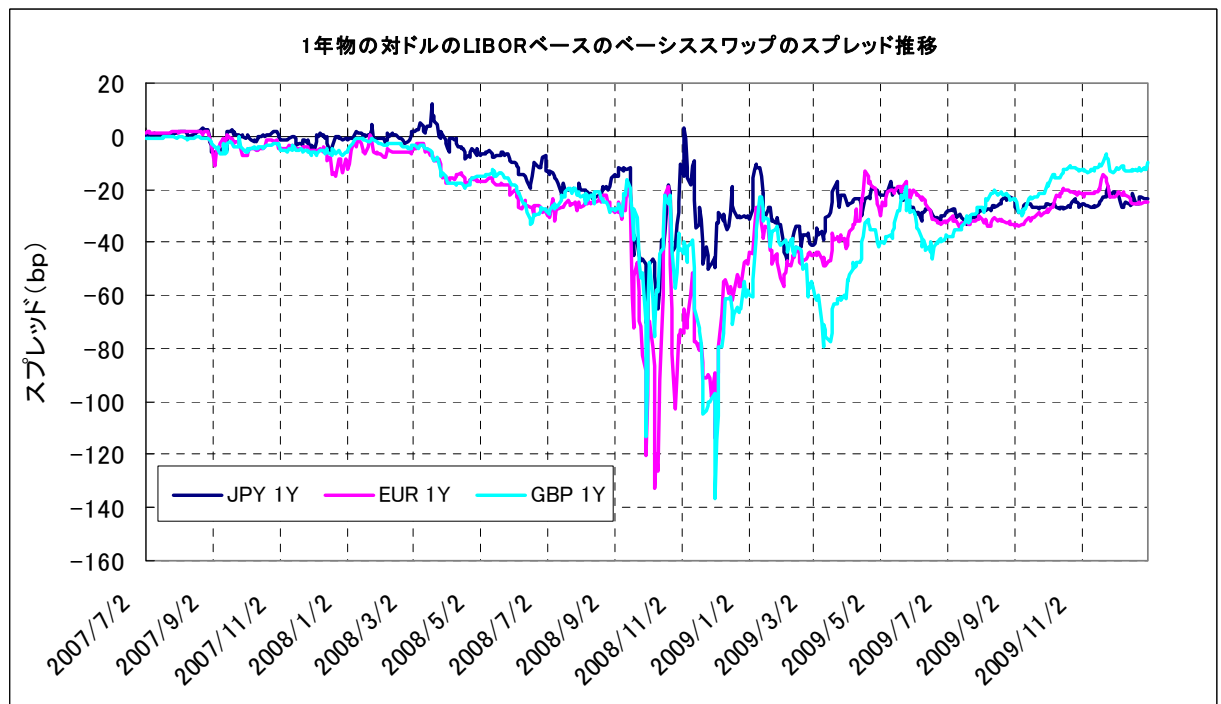


対 OIS スプレッドはほぼ変わらず。



ベーススワップスプレッドもほぼ変わらず。年の後半はドル不足が収束し落ち着いた動きに終始した。

【1年物】



(末永)